

張潮と張鼎梅・張鼎望兄弟の交遊——書簡の應酬を手がかりに——

小塚 由博

はじめに

1. 張潮と張兄弟
2. 兩者の書簡①——概要——
3. 兩者の書簡②——長文の書簡を中心に——
おわりに

はじめに

清初に揚州を據點として活躍した文人張潮（一六五〇—一七〇九？）は、警句集『幽夢影』や叢書『虞初新志』等多数の作品を制作・編集し、出版したことでも知られている。その背景には、當時の江南を中心として蜘蛛の巣のように張り巡らされた文人たちの交遊ネットワークが存在していた。張潮はそれを巧みに利用して、作品の編集や頒布・収集等の活動を行っていた。その具體的な様子的一端が窺えるのは、彼が友人たちと取り交わした書簡を集めた『尺牘友聲』

と『尺牘友聲偶存』である。この兩書簡集には、合わせて四〇〇名餘、約一五〇〇通の書簡が收められており、作品の制作や編集に關するより具體的な狀況を窺うことが出来る。筆者はこれまでこの書簡集を中心に、その狀況について調査・考察を行ってきた¹が、本論では張潮とその親類である張鼎梅・張鼎望兄弟（以下張兄弟と稱す）との間で取り交わされた書簡について見てみたいと思う。張兄弟は代々陝西涇陽に在任する官吏の一族に生まれた。そして兩者の書簡には他の人物の書簡と比べてもかなり長文の書簡が複數遺されており、その中で多數の作品がやりとりされている。本論では張潮及び張兄弟について簡單に述べた上で、揚州と陝西という、長距離離間での書簡がどのように傳達されたのか、またその書簡の内容はどのようなものか、更にはどのような作品が交わされたのか、その概要を探ってみたい。

1. 張潮と張兄弟

a. 張潮および作品編纂・出版活動について

張潮、字は山來、號は心齋居士・三在道人。安徽歙縣（新安）の人。父習孔（一六〇六—？）は順治六（一六四九）年の進士で、山東提學僉事等を歴任した人物である。早々に士官の道を斷念した張潮は、一六八〇年前後には揚州に移り住み、父から詒清堂という版元を受け継ぎ、様々な作品制作・編集に取りかかった。

張潮の作品には『心齋聊復集』『幽夢影』『花影詞』等のほか、當時流行した小品文が多い。例えば、『聯莊・聯驪』『課婢約』『花鳥春秋』『飲中八仙令』等である。更に同時代の著者たちの小品文を集めた叢書の編纂にも心血を注いだ。そして完成したのが『虞初新志』二十卷（一七〇〇年以降完成）、『檀几叢書』初集（一六九五年）・二集（一六九五年）・餘集（一六九五—一六九七年頃）、『昭代叢書』甲集（一六九六年）・乙集（一七〇〇年）・丙集（一七〇三年）である。

この叢書にはのべ約280名、456種の作品が収録されており、その多くは張潮が人伝え、もしくは著者本人より手に入れたものである。編集・出版されたこれらの作品は、書簡とともに各地の文人たちに寄せられた。後述の張兄弟との交遊も、これらの叢書が編纂・出版される時期とほぼ重なる。

b. 張潮の書簡について

前述のように張潮には、友人から寄せられた書簡を集めた『尺牘友聲』（以下『友聲』と稱す）と友人に贈った書簡を集めた『尺牘友聲偶存』（以下『偶存』と稱す）が存在する。兩書とも張潮と文人たちの交遊関係を知る貴重な作品である。本論でも張潮と張兄弟との関係を説明する重要な證據として用いることとしたい。詳細については拙論^②を参考にされたいが、構成や特徴等を簡単に説明しておこう。

『友聲』は全十五卷、300餘名に及ぶ友人達が張潮に寄せた1009通の書簡を収録。『偶存』は全十一卷、張潮が約170名の友人に寄せた456通の書簡を収録する。現存するテキストは、張潮の死後編纂されたものである（乾隆四十五（一七八〇）年刊）が、兩書簡集とも張潮存命中に随時纏められ、友人たちに配布されていたことが分かっている。その内容は多岐に涉るが、壓倒的に多いのは編集・出版に關するもので、作品の授受や贈呈の依頼（書簡とともに、金品も併せて傳達される場合もしばしば見られる）、作品の募集、編集・校訂作業の具體的な内容等様々である。その書簡の應酬をしている人物を列擧すれば、王族の愛新覺羅岳端（紅蘭主人）を始めとして、王士禛・朱彝尊・毛奇齡・萬斯同・孔尚任・張竹坡・閻若璩・尤侗・冒襄・余懷・王暉等當時の錚々たる文人達が名を連ねている。彼らは張潮と誼を結ぶことで作品を入手したり、張潮の叢書に自身の作品を投稿したりもしていた。

また、この書簡集にはその書簡が誰がどのように傳達したのかについて窺える記述がしばしば見られる。近代的な郵

便制度が確立されていなかった當時の書簡傳達は非常に不確かなもので、親族や使用者・知人・商人・僧侶等個人的なつてを頼りに行うしかなかった。そのため、書簡が豫定よりも大幅に遅れて届いたり、或いは何らかの原因で届かないことも珍しくなかった。言い換えれば、書簡傳達の成否にはその人物それぞれの交遊ネットワークが大きく影響していたとも言えよう。そのような意味で、この書簡集は當時の文人達の交遊ネットワーク解明の好資料であると言っても過言ではない。なお、本論で兩書簡集より引用・提示する場合は、便宜的に拙論^③に基づいて通し番號を附した。

本論で取り上げる張兄弟と取り交わした書簡にも、多くの作品が書簡とともに傳達されているが、またこの傳達者の問題も大きく關係している。

c. 張鼎梅と張鼎望―その一族について―

張潮の交遊關係を概観すると、江南の文人がほぼ大半を占めており、陝西出身のめぼしい文人は張兄弟以外に王弘撰^(一六二一—一七〇二)。字は無異、號は山史。陝西華陰の人)ぐらいしか見當たらない。しかも王弘撰は江南に滞在していた期間もあり、必ずしも陝西と揚州の間で書簡がやりとりされていた譯ではなかった。そのような中で、張兄弟との交遊は、張潮の交遊の中でも異例なことと言えよう。

そもそも、張潮と張鼎梅兄弟の家とは親族だったらしいが、具體的にどのような關係なのかについてはよく分からない。これについては、今後の課題としたい。なお、張鼎望については彼の著述「秦腔論」に關する言及^④は僅かに存在するが、彼らやその一族に關する詳細な研究は見られない。そこで張潮と張鼎梅兄弟との交遊關係について論じる前に、以下張兄弟及びその家族について簡單に見ておく必要があるだろう。

張一族については、地方誌等の史料に簡單に説明がなされている。また、張一族の作品や、他者の張一族に關する作

品が『涇獻文存』（以下『文存』と稱す）及び『涇獻詩存』（以下『詩存』と稱す）に多數收められている。その中で参考となるのが、張兄弟の高祖父にあたる張朝龍の墓誌銘である喬因羽「張長公墓誌銘」（『文存』外編卷五）やその父張重齡の墓誌銘である李鎧「張公九如暨雷安人墓誌銘」（『文存』外編卷五。以下「墓誌銘」と稱す）等であり、やや詳しい記述が見られる。それによると、張氏は代々陝西涇陽管村里（現在の陝西省咸陽市涇陽縣安吳鎮窩張村）に住む一族で、明初の張景中より、張聚、張秉、張鸞と續き、その子張縮の息子が張朝龍である。高祖父の張朝龍は奉直大夫・山西寄嵐知州、曾祖父の鑑は山西太原府同知、のち運鹽使司運同、祖父の炳璿は直隸滿城知縣という代々官僚の家柄であった。その次男が張兄弟の父である重齡であり、彼も直隸順德府邢臺の知縣となり、後工部都水司主事となっている。以下、主要な人物について簡単に見ておこう。

◎張朝龍（一五二三—一五八三）、張鑑（二五四五—一六〇五）

朝龍字は君愛。子に張鑑・張鎔（不詳）がいる。張鑑（字は孔昭、號は湛川）は萬曆元（一五七三）年の貢士。『易占發蒙說略』『八陣推衍圖』の他、詩文集もあったようであるが、未傳。『文存』に「第五氏改建先世祠堂記」（正編卷五）、「湛川要語」（正編卷十）有り。なお、張鑑の妹が王應選（字は澹北。涇陽魯橋鎮の人。一五四九—一六二八）に嫁ぎ、その間に生まれたのが明代天主教の代表的な信仰者の一人であった王徵（一五七一—一六四四。字は良甫）であり、彼の作品も後述の張潮と張兄弟との間でやりとりされている。

◎張炳璿（一五八七—一六六一）

張炳璿（字は義照〔儀昭〕）は號を胤菴といい、順治五（一六四八年）年の舉人。知縣として善政を敷いたが、清廉な人柄で時の風俗と合致せず、官を辭めて故郷に歸り、著述活動に勤しんだという。王徵・洪承疇（一五九三—一六六五）・路振飛（一五九〇—一六四八）・來復・錢謙益（一五八二—一六六四）等と交遊あり。樂府に巧みであり、また

著書として『飢菴集』二十卷があったが、未傳¹¹⁾。『文存』に「王公葵心傳」(正編卷六)、「七十初度自介衷言」(正編卷十二)、『詩存』に「自嘲放歌「聽王良甫先生說山」」(正編卷一)、「和同春園卽事」(正編卷一)等有り。

◎張重齡(一六一四—一六七七)

彼については、「墓誌銘」や劉於義『陝西通志』¹²⁾、宋伯魯『重修涇陽縣志』¹³⁾等に記述がある。それによると、張重齡、字は九如、號は倚峨。順治戊子(五—一六四八)年の擧人。順治十二—一六五五)年に直隸順德府邢臺縣の長官に任命された。彼は縣内で冤罪事件が発生した際、その洞察力で解決した。後、工部都水司主事に補せられ、(山東)通昌の農地・寶源錢局(貨幣鑄造所)等を監督するよう命ぜられた。その才能は大司空にも匹敵すると稱せられたが、積年の疲労により休養のために歸郷して卒した。王弘祚(一六一〇—一六七四)・魏裔介(一六一六—一六八六)等と交遊有り。作品として、『臨清樓文集』¹⁴⁾があるが、未傳。また葛晨『涇陽縣志』(十卷本)に彼の序文(康熙九—一六七〇)年)が見られる。なお、彼には潮問という兄がおり、萬曆丙午(三十四—一六〇六年)の貢士で、五十歳で死去した。妻は治中李弘楨の女。子として鼎璫・鼎鎮・鼎蕈・鼎穀がいる¹⁵⁾。

◎張定和(?—一六九二)

母は雷安人。張鼎梅・張鼎望の異母兄にあたる。歳貢生で、擧人の師心知(字は君異。崇禎十五—一六四二)年の擧人)の女を娶り、繼いで員應龍(不詳)の女を娶った。なお、後述の通り妻員氏の親族が張潮と張兄弟との間で書簡傳達を擔っていた可能性がある。彼は康熙三十一—一六九二)年に没しており、張潮との交遊があったか否かは記録が無く不明である。彼についてはこれ以上のことはよく分からない。

◎張鼎梅(一六四七—一七一四)

張兄弟に關して、前掲の「墓誌銘」に彼らの職位や妻子について記述¹⁶⁾がある以外は極めて斷片的で、情報量も少ない。

その他の資料も含めて分かる範囲内で兩者について見ておこう。

張鼎梅、字は肅月（嘯月とも）、鼎望の兄。康熙二十九（一六九〇）年に舉人となり、康熙三十六（一六九七）年に進士に合格した。母は申安人（一六三一—一七二二）。弟張鼎望の記した「祭五兄文」（『文存』正編卷九）によると、「丙辰」（康熙十五（一六七六）年）に「兄三十而弟十四」であったことや、康熙五十三（一七一四）に病死していること等が分かる。『陝西通志』（卷三十・三十二）や『重修涇陽縣志』（卷十）によると、彼は山東東明知縣に任じられており、儲元升『東明縣誌』卷四（乾隆二十一（一七五六）年序）によると、東明知縣の任は康熙四十四（一七〇五）年より四十六（一七〇七）年である。彼は法を遵守し、善良な性格で、父重齡の氣風を有していたという¹⁹。彼の交遊關係には、親族の王永春（王徵の孫）・王承烈（王徵の曾孫）を始めとして、朱彝尊（一六二九—一七〇九）・張恂・王弘撰等がいる。著作としては『嘯月詩集』、『臨清樓文集』²⁰があるが、未傳。『文存』『詩存』にも收められていない。『東明縣誌』卷八に張鼎梅が制作した「創建魁樓碑記」が採録されている。

なお、前掲の「墓誌銘」の作者李鎧（字は公凱。號は惺庵・良齋。江蘇淮安の人。順治十八（一六六一）年の進士）は張鼎梅の師であり、張鼎梅の要請で「墓誌銘」を記したという²¹。また、鼎梅の妻は文學常日昕の女である。

◎張鼎望（一六六一？—一七一四以降没）

張鼎望、字は荆觀、號は冷公、また渭濱。鼎梅の弟。國子監生。葛晨『涇陽縣志』に詩・文が數篇掲載されている²²。

また、作品として『魯橋人物志』『臨清樓詩集』²³があるが、未傳。彼の作品として、『文存』に二作品、『詩存』に十四題が收められているが、『文存』の「祭五兄文」（正編卷九）、『詩存』正編卷二の「懷五兄」「慰兄鄉薦不售」「慰五兄」「家五兄嘯翁橫吹歌」「喜兄膺鄉薦」「秋夜慟思先五兄」等兄鼎梅に對する作品が大半を占めている。如何に兄を慕っていたか、その様子の一端が窺える。張潮に寄せた書簡によると、彼は若い頃病を發し、舉子の業を斷念したという。更

に李因篤（一六三一—？）。字は子徳。陝西富平の人）と交遊があり、一時彼に教えを受けたと述べている。⁽²⁾ なお、彼の妻は元湖南辰州府同知王廷棟の女である。

なお、試みに文末に参考1「涇陽管村里張氏關連略圖」（推定）を附したので、こちらにも参照されたい。

2. 兩者の書簡①—概要—

管見の限り、張潮と實際に對面を果たしたのは、兄の鼎梅だけである。後述の通り弟鼎望が寄せた書簡に「戊寅（康熙三十七—一六九八）年）の秋に、仲氏（二兄⁽³⁾鼎梅）が南から戻り、…」（『友聲』889）云々とあり、この時張潮とも會見したのではないか、と考えられる。また鼎梅自身が後に「別來五易十支…（一別以來五年が過ぎ…）」（『友聲』951・一七〇三年頃）と述べており、一度きりの對面であったと推定される。一方の張鼎望は病氣がちで、張潮のいる揚州に赴くことが叶わなかった。つまり、張兄弟と張潮の交遊の大部分は書簡によって行われていたと言って間違いないであろう。

張潮と張兄弟との間で取り交わされた書簡はのべ十九通にもなる。以下のア・イの表の通り、張兄弟のうち張鼎梅5通（『友聲』2／『偶存』3）、張鼎望14通（『友聲』5／『偶存』9）であり、張鼎望と取り交わした書簡の方がかなり多いし、また分量としても張鼎望の書簡が圧倒的に多い。また、『友聲』888（張鼎梅）と『友聲』889（張鼎望）、『友聲』951（張鼎梅）と『友聲』952（張鼎望）、『偶存』321（張鼎梅）と『偶存』322（張鼎望）の書簡は鼎梅、鼎望の順番で連續して收められていることから、一緒に贈られ或いは受領されたものと考えられ、書簡の内容から張潮と張鼎望の間で仲介役を勤めていたのではないかと推定される。更に『友聲』では951、『偶存』では327の書簡以降張鼎梅に關す

る書簡は存在しない。これは、前述の通り張鼎梅が一七〇五年以降、山東東明知縣として赴任した事が関係しているのかもしれない。以下、各書簡の概要について、ア・イに一覽表に纏めた。

ア. 各書簡の概要（『友聲』）

No.	所在卷	差出人	字數	年代	贈	受	呈	編	制	出	情	傳	他
1007	新集卷五	張鼎望	403	"	○	○		○		○	○		
1001	新集卷五	張鼎望	619	"	○	○		○		○	○		
995	新集卷五	張鼎望	428	一七〇五	○	○	○						
952	新集卷四	張鼎望	449	一七〇三	○	○							○
951	新集卷四	張鼎梅	318	一七〇三		○						○	
910	新集卷三	張鼎望	657	"					○		○	○	
889	新集卷三	張鼎望	427 <2068>	"	○	○	○	○	○	○	○	○	○
888	新集卷三	張鼎梅	225	一七〇一・二		○						○	○

※『友聲』には個々の書名が無く、便宜的に「與張山來」としている。 ※字數へへ内は割注の字數。
 ※年代はあくまで『友聲』『偶存』の配列順や書簡の内容から推測した一つの目安であり、確定ではない。以下同じ。

イ. 各書簡の概要（「偶存」）

No.	書名	卷數	宛て先	字數	年代	贈	受	呈	編	制	出	情	傳	他
415	「復張渭濱」	卷十	張鼎望	555	一七〇五	○						○	○	
403	「復張渭濱」	卷十	張鼎望	206 928	〃	○	○					○	○	
390	「寄家渭濱」	卷十	張鼎望	281	一七〇二 ・三	○						○	○	
371	「寄張渭濱」	卷九	張鼎望	394	〃	○		○	○			○	○	
338	「寄家渭濱」	卷九	張鼎望	314 616	一七〇一	○			○			○	○	
337	「寄家嘯月進士」	卷八	張鼎梅	120	〃	○							○	
322	「答家渭濱」	卷八	張鼎望	1403	〃	○	○		○					
321	「復家嘯月進士」	卷八	張鼎梅	108	一七〇〇	○	○						○	
262	「寄家嘯月進士」	卷七	張鼎梅	128	一六九九	○							○	

※「贈」以下は書簡に次のような内容が含まれるか否かを示す。贈—作品の贈呈、受—作品の受領、呈—作品贈呈の依頼、編—編集上の記述、制—作品制作の依頼、出—出版の依頼、情—學術的・趣味的な情報の交換・問答、傳—書簡の傳達全般 他—その他

437	431	427
「與張滑濱」	「寄張滑濱」	「復張滑濱」
卷十一	卷十一	卷十
張鼎望	張鼎望	張鼎望
259	156	436
〃	一七〇四 ・五	一七〇二 ・三
○		○
○	○	○
○		○
		○
○	○	
○		

書簡の内容として歴倒的に多いのは作品の贈呈と受領に関するものである。書簡中には後掲の参考2一覽表のように、夥しい数の作品が登場している。中でも自身や親族の作品が多いのは勿論であるが、知人を介して他者の作品の授受や搜索の依頼に關する記述、或いは音韻や骰牌等に關する知識の交換もしばしば見られる。

なお、書簡中には贈呈或いは受領した月日や季節が記されている場合もまま見られるが、年については明記されておらず、判然としない。これについては今後の課題としたい。

ウ. 書簡の傳達者について

書簡中には、書簡の傳達者について記されている場合がしばしば見られる。張潮と張兄弟の書簡傳達には、書簡によって呼稱が異なるが、少なくとも以下 a、d、4名の人物が關與している(以下へ)内はそれぞれの書簡での呼稱。彼らは、片道或いは往復の傳達を行っていた。

a. 員虞翁(友889〈員舍親〉/偶262〈員虞翁〉、371〈員令親〉)

令親は相手の親類の稱、舍親は自身の親類の稱であるから、張兄弟側の親類であることがわかる。先に述べたように、

張兄弟の兄である張定和の後妻員⁽²⁶⁾氏の關係者ではなからうか。

b. 申六老 (友 888 〈申六舍親〉、889・910・995 〈申舍親〉、952 〈申六老〉) / 偶 431 〈申令親〉)

申六老とは恐らく張重齡の後妻申安人⁽²⁷⁾の親族または姉妹の夫申培楫 (申嶼の子) 本人或いは親族のことか。『友聲』888に「しかし先の一通は結局まだ届いておりません。何故届かなかったのか、原因をお調べ頂ければ幸いです。いま申六舍親が揚州に赴きますので、ご機嫌をお伺いし⁽²⁸⁾」云々とあり、また『友聲』995にも「昨年夏五月に申舍親が戻りお手紙を頂戴し⁽²⁸⁾」とあり、往復の書簡傳達を行っていたと思われる。

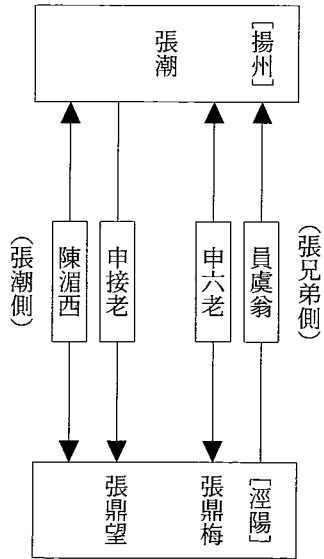
c. 申接老 (偶 321 〈申舍親〉、偶 390 〈敝連襟申接老〉)

bの申六老とは別人であり、張潮の親族と思われる。『偶存』321に「申舍親と會い、老長兄先生 (張鼎梅) がご健勝でいらっしゃるとのを知り⁽³⁰⁾」とある。なお、「連襟」とは姉妹の夫をさす。

d. 陳西湄 (友 951・952 〈陳西老〉) / 偶 337・371 〈陳西湄〉)

『偶存』337に「西老爲貴省華中丞令親」とあり、陝西の人物で、華中丞⁽³¹⁾の親族であることは分かるが、それ以上のことは不明。張潮の知人か。後述の通り彼の傳達する書簡はしばしば遅延することがあり、あまり信用されていないかったようである。

以上、書簡の傳達について試みに圖式化すると以下の通りになる (圖中「↑」「↓」は、どちら側に傳達を行ったのかを表す)。



エ. 書簡の遅延と不達について

書簡中には、傳達者によって傳達物の遅延や損壊が発生していた様子が窺える。例えば、

∴。〈お贈り下さった〉諸書は、窮葉〈竹の葉〉で包んで保護されていて、喜ばしいことに雨水で濡れた所はございません。しかしながら、採損〈折れ曲がり?〉が半分以上もあり、大きな石で寝押しをして、何日かけてもまだ平らになりません。今後、もし忝くもまたお寄せ下さる時は、ただ申舎親に委託するのが宜しいでしょう。きっと彼は巾箱〈手文庫〉に入れてくれると思いますので、これらの心配はご無用です。その上、〈彼の〉住まいは我が家の近くにあり、その日のうちに轉送し(届け)てくれるのも便利です。∴。(張鼎望『友聲』910)

とあり、この記述から張鼎望は親族の申某(申六老)の傳達能力に對する信頼ぶりが窺える。また、彼の住まいが近所であったことも分かる。なお、張鼎望は一説によると、故郷の管村里ではなくその近隣にある魯橋(三原縣の西の外れ)に住んでいたともされる⁸³⁾。また、以下のような記述もある。

夏の日、お手紙に接し、「昨年の秋にご著書を贈って頂いた」とありました。私が考えますに、それは昨年の夏に寄せたものです。また、「私〈張鼎望〉の〈差し出した〉次の手紙は既に拜受しました。目下氣鬱を抱いているため、返答するには及んでおりません」ともあります。つい先日十月十三日に、また長文の手紙並びに書籍一束に接し、その中で仰る内容は大抵は前札を補足したものです。またことが盡くされておらず、私の贈った（はずの）手紙については、一言も書かれておりませんでした。初めてこれを見た時には、茫然として詳細を読み返してみても、やっと長文の手紙が短い手紙の前にあり、この短い手紙が届いた日、この長文の手紙はまだ遅れて届いておらず、年を越してから到達したことがわかりました。へそれは陳西老が一定の場所に留まらないためでしょう。送り届けた者がもし申舎親であったならば、きっとこのような問題はなかったに違いありません。⁽³⁴⁾（張鼎望『友聲』952）

以上の記述から分かるのは、張潮が寄せた①「長札」と②「短札」が、②↓①の順番で届いたということであり、その原因は書簡の傳達者であった員虞翁及び陳西涓が何らかの理由で遅れて届けたためであった、と推測される。

これに關連して、『偶存』371では「昨年」冬のお手紙が今年の二月二十日に届きました。大變なことだなあ、手紙を寄せる難しさは。つぶさにお手紙を読むと、私が寄せた二通の手紙が先後順番が間違つて届いてしまった事を知りました。これは員令親が半年遲滞し、また陳西老に託して送り届けさせたところ、このようになってしまいました⁽³⁵⁾と述べている。また、『友聲』100にも「初夏に書籍に手紙を添えてお贈りましたが、秋分になつてもまだお返事が戻つて來ません。お手紙が届いているのか否か心配です。ついでお手紙と新作四種に接しましたが、昨年のもので、かなりの遅延が発生していると分かりました⁽³⁶⁾」とある。他にも寄せた書簡（『偶存』390）が届かないことを知つたり（『偶存』401「不識何以尙未達雲亭也」）と、何度も書簡の不達に關する記述が見られる。

これ以外の書簡にも類似の文章が見られることから考えて、兩者の書簡、とりわけ張潮が張兄弟に寄せた書簡に度々

遅延や不達、或いは寄せた順番に届かない等のトラブルが起こっていたと考えられる。そのため、現存している書簡の時系列には不順が存在していると考えられる。いずれにせよ、その原因は傳達の不確實性という當時の書簡傳達の重大な問題があったと考えられる。

3. 兩者の書簡②―長文の書簡を中心に―

前掲の表のように、張潮と張兄弟との間で交わされた書簡には、長文のものが複数存在する。その内容の大半を占めているのは、作品の授受や作品編集に關するものである。紙數の都合もあり、これらについて全てを見ることは出来ないが、中でも特徴的な書簡をいくつか挙げて以下簡単に内容を見てみたい。

a. 『友聲』889・張鼎望の書簡

この書簡は、最も字數の多い書簡である。この一つ前に収録されている張鼎梅の書簡(『友聲』888)によると、張鼎梅は嘗て張潮の諸作品を(直接?)拜領し、張潮に敬愛の念を抱いていた。郷里に戻った後も、親族の申某を通じて書簡のやりとりを行っていた。また、弟の鼎望も張潮に私淑したいと願っていることを述べている。この書簡は次の張鼎望の書簡と同時に寄せられた可能性が高く、弟鼎望と張潮とを仲介するものと考えられる。以下、次札張鼎望の書簡の内容を見てみよう。

戊寅(康熙三十七(一六九八)年)の秋に、仲氏(二兄。鼎梅)が南から戻り、廣陵(揚州)に山來先生という當世の偉人がいると聞いた。關中は度重なる兵火で文献が歛損し、常々残念に思っていた。また、當世は八股分ばかりが重

んぜられて、古文が輕視されていた。本來であれば張潮に直接教えを請いたいところであるが、病氣がちで、母親が家にいる都合上、揚州を訪ねる事もままならない。そこで唐の李白と任華のように、文章の交流を希望する。張鼎望は小字で以下のように要望した。(小塚注)以下、雙行で簡條書き。便宜的に○數字で通し番號を振った。³⁸⁾

①張潮の父習孔の『詒清堂集』(十七卷)の拜領、更に『檀弓問』『雲谷臥餘』を希望する。

②張潮の諸作品の拜領。ただ『聊復集』『花影詞』『下酒物』『逸民四史』『李杜牌』『博古牌』『弈乘』『禽史』『禪世說』『仙世說』『二十四孝贊』『張籍全集』(張籍、字は文昌。中唐の詩人)の十二種は未見、贈呈を希望。但し『張籍全集』は(張潮の)著作ではないので、紙代は補填する。

③『四書尊註解』(張庸德)張九達四書尊註會意解』三十六卷のことか。詒清堂(張潮の版元)刊本)の拜領。

④家兄(張鼎梅)二律詩の詩句の推敲について。

⑤拜領の作品に散葉があることを指摘。補完を要請、紙代は補填する。

⑥『壇几叢書』『虞初新志』の未入手分の希望。紙代は補填する。

⑦拜領した『友聲』が壬集の第二十六葉の釋廣蓮の書簡(『友聲』696)までしかない。また『偶存』も五卷第十三葉の「與四弟質生」(『偶存』199)の書簡で終わっている。散葉を補完することを要請。

⑧『友聲』朱其恭(朱慎、字は其恭、號は菊山。浙江武義の人)の書簡³⁹⁾について。詩(七言古詩)を書簡に代えて掲載している。別に韻文を集めた集を編纂するよう希望。

⑨『友聲』海寧の沈岱瞻(字は高士)の札に『十三經文釋』に関する記述有り。『逸史大觀』編纂の提案。

⑩『太平寰宇記』『括地志』『漢官儀』『古今注』等の書はみな嘗て世に顯傳されたものであったが、現在では稀に見る書籍となってしまう。これらの書物の収集・翻刻を希望する。

⑪韻書について。清初の顧炎武、李因篤の議論に至るまでの韻書の變遷を論ず。

⑫音韻について。李文山（李沂、字は子化、號は文山・壺菴）への返信（『偶存』52）を引用しながら、通韻や合韻等について論ず。

⑬朱襄（贊皇）の札（『偶存』卷二・103「復朱贊皇」）に「集句詩」（古人の詩を集めて一詩を作るもの）の選集について言及がある。「帳子語」（書き付けや小札等に記す對句のことか？）にも專集は無い。『笑史』（馮夢龍編）（山中）一夕話（李贄編、笑笑先生増訂とされる）等にも名聯がある。「帳子語」を集めた選集の編纂を希望。⑭戲曲の批評について。『西廂記』『琵琶記』はそれぞれ金聖嘆・毛綸が評を附しているが、『拜月亭』には無し。張潮に制作するよう希望。

⑮『竹枝詞』について。朱彝尊・尤侗・徐沙村（不詳）等の「竹枝詞」有り。張潮の「竹枝詞」を望む。また、古今の「竹枝詞」を集めた選集の編纂も希望。

⑯『虞初新志』の凡例は他者の規則の弊害や疎漏を除去して改善されている。同様に詩集の編纂する場合には、採録の基準について年代別（四唐）や場所や人物の貴賤で分けることがないよう希望。

⑰「寒家三代志銘」はまだ纏めきておらず、上梓出来ず。代わりに先曾祖（張鑑）の「諡記」一通、先祖（張炳璿）「別傳」二則を贈呈。

⑱張鑑『易占發蒙說略』の進呈。出版希望。

⑲先祖（張炳璿）に『胤菴菴集』二十卷があったが、大半が散逸してしまった。そこで取りあえず「手讓文」一篇・曲二套・また舊刻の『杜陵秋咏』一冊を進呈。

⑳拙作の進呈（賦八篇・集杜三十首・集唐八首・曲一套・竹枝十首・對語十條）。

②「涇陽？」八景考」の進呈。倡和希望。

③今後もし書簡を寄せる際は、ぜひとも申舎親（申六老）或いは員舎親（員虞翁）に託してほしい。場合によっては、足代は私（鼎望）が補填する。^④

以上について、内容を簡単に纏めると、以下の三點となる。

①作品の贈呈と受領

贈呈—張庸徳『四書尊註解』、張鑑「論記」、張炳璿「別傳」、『易占發蒙說略』、「手讓文」、『杜陵秋咏』、拙著
（賦八篇・集杜三十首・集唐八首・曲一套・竹枝十首・對語十條）

受領—『詒清堂集』（十七卷）『檀几叢書』（一集・二集）『虞初新志』（卷八まで）『友聲』（壬集途中まで）『偶存』（卷五途中まで）

②作品の寄贈希望、作品制作の提案、出版の希望

寄贈希望『檀弓問』『雲谷臥餘』『聊復集』『花影詞』『下酒物』『逸民四史』『李杜牌』『博古牌』『弈乘』『禽史』
『禪世說』『仙世說』『二十四孝贊』『張籍全集』『檀几叢書』（餘集）『虞初新志』（卷九以降）『友聲』

（歛損分）『偶存』（歛損分）

制作提案—『逸史大觀』『帖子語選集』『竹枝詞選』

出版希望—『太平寰宇記』『括地志』『漢官儀』『古今注』

③學術情報の交換

韻書と音韻について

以上のように、書籍や作品に關する内容が大半を占めている。また、この書簡は張潮に返信を求める内容ともなっており、それに對應していると思われる張潮の書簡が、以下bの書簡である。

b. 『偶存』³²²「答家渭漬」・張鼎望への書簡

昨年の冬、老宗臺先生（張鼎望）の書簡および著作が届いた。一方、作品の贈呈については、病がちで多忙のため、印刷に遅れが生じている。以下箇條書きで張鼎望の要望・質問に回答している（小塚注―○数字の通し番號は掲掲『友聲』389の割り注の番號と對應^④）。

(1) ①先君（張習孔）の各種著書を追加して呈上。確認次第返信を求む。

(2) ②張潮自身の作品の追加呈上。『聊復集』は若い頃の作品であり、在庫が無い。「下酒物」は『昭代叢書』（小塚注―現存の叢書に見當たらぬ）収録のもの、加えて『三字經閨訓』（女性に教えるための『三字經』か。不詳）も呈上。『禽史』『禪世說』『仙世說』はまだ書になっていない。ただし、『李杜牌』はすでに翻刻済み。『博古牌』は原稿を呈上、指正を依頼する。「張文昌集」は龔半千（龔賢。？―一六八九）がどこにいるかわからず、捜しようがない（小塚注―この書簡が寄せられた時には、龔賢は既に死去している）。

③該當文章なし

(3) ④張鼎梅家兄の詩について、句の推敲。

(4) ⑤か⑥？ お命じの通り装丁する。

(5) ⑦『友聲』全編（この時點で八卷分）を進呈。以後續刊。

(6) ⑧朱愼の書簡は、詩を書簡の代わりにしている遊戯の作品に過ぎない。詩に關しては、原稿が集まれば、別に刊刻する豫定。

(7) ⑨『十三經文釋』については、實際に目を通してゐる。『吳越春秋』『東觀漢記』『英雄記』『十六國春秋』『舊唐書』等は皆すでに刊行されているものばかりであり、これを一纏めにしても、世の支持は得られないであらう。

(8) ⑩『太平寰宇記』『括地志』『古今注』はみな『漢魏叢書』に採録されている。

(9) ⑪韻學について。「一定不移の理」がある。顧寧人(炎武)と李子德(因篤)の論には源流がある。李東陽を惡く言うのは誤りである。顧天石(顧彩)の書簡にある「近得古本」とは、『廣韻』のこと、等々。

(10) ⑫韻について。韻の合用・通用などについて歴史的な變遷を述べる。

(11) ⑬「帖子語」及び「掛枝兒」「打棗竿」(民間歌曲)、「劈破玉」「倒搬槩」「呀呀啣」(明朝で流行した歌曲)諸調について。酒令・雅謎(詩謎)について。

(12) ⑭『拜月亭記』等の批評は金聖嘆にしか出來ず、毛綸も張竹坡もやや劣り、私には能力的に不可能である。あなたこそ金聖嘆と並ぶ人物であり、批評を加えたら如何であらうか。

(13) ⑮『竹枝詞選』は以前より構想はあるが、その作品収集は容易ではなく、中途半端なものを作つては、識者の譏りを受けるであらうから、輕々には出來ない。

(14) ⑯詩を選ぶ場合、常に四唐で分けることはない。ただし私は詩の編纂はあえて行わない。

(15) ⑰令先祖老先生(張鑑)の「諡記」、令先祖老先生(張炳璿)の「別傳」の受領。先學張憲生(不詳。張潮の親族か)の「行狀」を呈上する。

(16) ⑮『易占發蒙(説略)』『手讓文』『杜陵秋咏』の受領。

(17) ⑯大著種種はすべて良い。ご威光をお借りしたい。

(18) ⑰貴郷の「八景考」は友人が吳門(蘇州)に持って行ってしまい、消息不明である。ご指示を待つ⁴³。

⑱該當文章なし

以上の通り、ほぼ張鼎望が先の『友聲』889の書簡で記した通りの順番で回答をしているように見られるが、果たして間違はなくそれを受けて寄せたものなのか否かは不明である。前述の通り、幾度も書簡の遅延や不達が発生しており、何通も出した中の一通なのかもしれない。

c. 以降の展開

以上の項目のうち、これ以降も別の書簡で話が繼續する話題がある。以下、その填末を簡単に記しておこう(○数字は前掲『友聲』889の通し番號と對應)。

①『詒清堂集』を受領して、中身に目を通した張鼎望は、(張習孔の)「本傳」と「墓誌銘」を附してはどうかと提案した(『友聲』910)。これに對する張潮の回答は見られない。なお、現存の『詒清堂集』にはどちらも見られない。

②『李杜牌』(張鼎望補校(『友聲』995))『博古牌』(牌は骨牌へかるた)は、その遊び方のルール等について何度も情報が交換されている(『友聲』952・1001/『偶存』415)。張潮は「二十四孝贊」は改修本が何處にあるか記憶にない。原本が一冊残部があったので贈呈する、とする(『偶存』403)。張潮は『偶存』338において、制作を計畫していた『逸民四史』『禽史』『禪世説』『仙世説』『説夢』『月窟』『湯泉志』『名泉志』『塔志』各作品についてその内容を説明し、最後に

張鼎望に對して「是非ともこれ（史料）を當局各部署にお求めになり、各部署に更に知人がいれば、それぞれ捜し求めて下さり、またその保存すべきか否かをお酌みになった上で、それぞれ一書として欲しい」云々と制作に關する助力を求めている。現在これらの書は管見の限り遺されておらず、恐らく状況から考えて完成しなかつたのであろう。一方、『逸民四史』等の編纂について、張鼎望は『友聲』952において再び言及している。『張文昌全集』については、張鼎望が再度賜るよう要請をしており（『偶存』995）、張潮は板木が行方不明であるとしていた（『偶存』403）が、その後『偶存』415では『張文昌集』を贈っている。

⑥以前寄せた『虞初新志』は十二巻まで。今續けて八巻が完成したので、全二十巻として進呈する（『偶存』403）。

⑨張鼎望が指摘するように（『友聲』1007）、『十六國春秋』をこよなく愛していた張愴曾（字は庭碩。張潮の兄の子）の「十六國年表」が『昭代叢書』乙集に收められている。

⑩張潮が『漢魏叢書』中に收められていると指摘した諸作品について、張鼎望は『漢魏叢書』を實際に入手して最初から最後まで確認したが、『太平寰宇記』『括地志』等は見つけられなかつた（『友聲』910）。張潮はそれを承けて『漢魏叢書』七十六種のうち、『太平』寰宇記』『括地志』等の書が無い、とのお問い合わせですが、私が見た『漢魏叢書』は一種類ではなく、ある本にはこれがあつてもあれが無く、別の本にはあれがあつてもこれが無い、という具合です（『偶存』371）云々と述べている。そもそも、『太平』寰宇記』は北宋、『括地志』は唐の書物であり、『漢魏叢書』に載るべき書ではない。或いは張潮は別の叢書（明・陶宗義編『說郛』等）を見て勘違いしたのではないか。⁴⁷

更に張潮は續けて「思うに古人がまだ總目を編じていないため、數種の作品が無くなつても調べる術がございません。この書籍を目にしましたら、重複して購入することも妨げません。よろしいでしょうか。しかしながら完全に（集めること）は不可能でしょう。陳眉公（陳繼儒）の『寶顏堂』秘笈』もこの問題を抱えています。私は以前よりこれを戒

めにしております。そこで拙選の叢書は、毎巻の前と板心に叢書の總名を刻むことにしました。また（その下に）巻数を付け、各種の作品名はその次に付けましたので、遺失する心配は殆どありません⁽⁴⁸⁾とも述べており、ここから張潮の叢書編纂に對する方針の一端が見られるが、『漢魏叢書』に關する話題はこれ以降見られない。

⑬ 『偶存』 427に張鼎望が制作した「秦腔論」（現存せず？「秦腔」は陝西の地方劇の曲種）に關する記述がある。

⑭ 「手讓文」の出版について。張潮は「令祖老（張炳璿）先生の「手讓文」ですが、これに類する作品の投稿が非常に多く、『檀几叢書』餘集の選例ともまだ合致しておりません」（『偶存』403）云々と述べ、『檀几叢書』の凡例に合致しないので掲載しない、としている。これに對して諦めきれない張鼎望は「先祖（張炳璿）の「手讓文」並びに填詞が投げ返されてきました。たまたま手違いがあったのでしょうか。また『檀几（叢書）餘集』は、みな細かな小品作品であり、「手讓文」は當然採用されるべきでしょう。先生はどうして一顧だにせず、このままにしておくのでしょうか」云々（『友聲』952）と述べている。すると後に「先の「手讓文」ですが、先生はほぼ印刷なさって、しかも美評をお加え下さいました。あなたの立派なお氣持ちは死んでも忘れません。その出版經費は無論補填致します」（『友聲』1001）と記しており、叢書には収録されなかったが、何らかの形で出版されたようである。しかしながら、その詳細は不明である。その他にも特筆すべき事項が若干見られるが、紙數の都合上本論ではここまでとしたい。

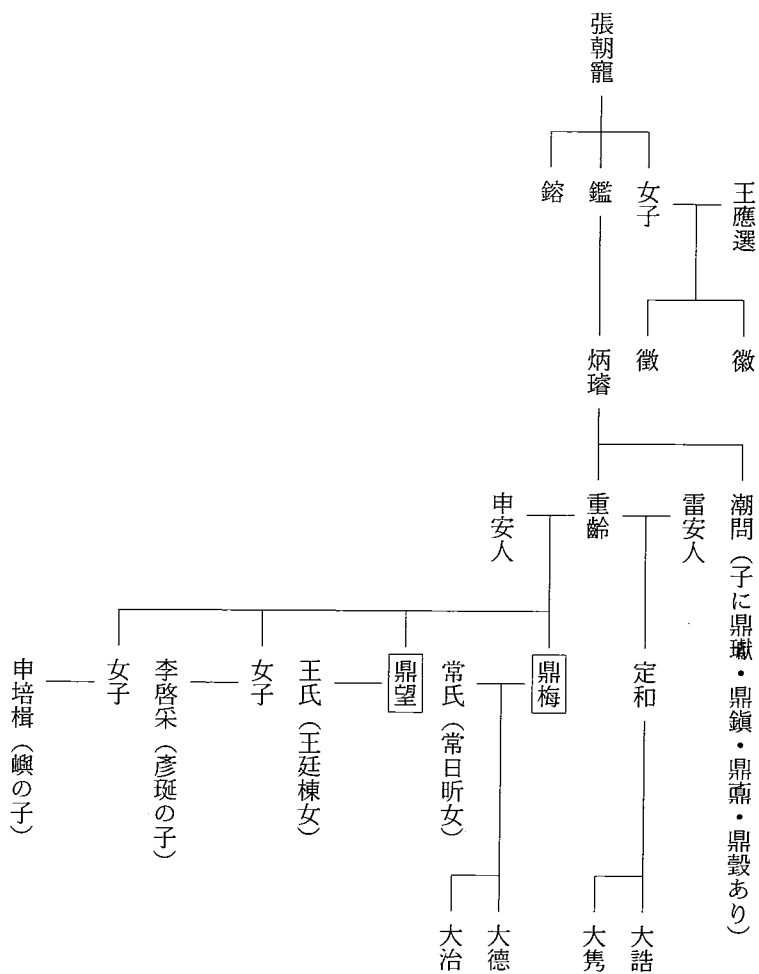
おわりに

以上、張潮と張兄弟との交遊關係について、書簡を手がかりに考察した。揚州と陝西と遠く離れていた兩者間では、主に書簡での交遊が行われた。書簡が取り交わされたのは、資料の上からは一六九八年頃～一七〇五年頃の事であり、

これは張潮が様々な叢書や作品を編纂し刊行した時期とほぼ重なっている。しかし、張兄弟及びその親族の作品は叢書には採用されず、別の形で出版されたものもあったようであるが、現在は全く遺されていない。

一方で書簡の内容として大半を占めているのは、やはり書籍の授受や編集上の記述、更に學術的な情報交換である。これらより清初の出版や書籍の流通事情の一端を窺うことが出来る。しかしながら、両者の應酬した書簡は數も分量も多く、その上内容は雑多で廣範圍に及ぶため、本論ではそのごく一部を述べるに留まった。今後は書簡や周邊資料を更に精査し、兩者の關係について迫るとともに、清初の交遊文人ネットワーク及び書簡の傳達網の解明へと繋げていきたい。

参考1 「涇陽管村里張氏關連略圖」(推定)



参考2 「張潮と張兄弟關連書簡中に見られる書名・作品一覽」(暫定版)

張潮關連の作品	張兄弟關連の作品	他者の作品	備考	登場書簡
『詒清堂集』			a 張習孔作	友 889・910
『檀弓問』			a 張習孔作	友 889
『雲谷臥餘』			a 張習孔作	友 889
『(心齋)聊復集』			c 張潮作	友 889 / 偶 322
『花影詞』			c 張潮作	友 889 / 偶 322・415
『下酒物』			c 張潮作	友 889 / 偶 322
『逸民四史』			c 構想のみ	友 889・952 / 偶 338
『李杜牌』			a 張潮作	友 889・1001 / 偶 322
『博古牌』			a 張潮作	偶 322・390 910・995・1001 /
『弈乘』			c 構想のみ	友 889 / 偶 322
『禽史』			c 構想のみ	友 889 / 偶 322・338
『禪世說』			c 構想のみ	友 889 / 偶 322・338
『仙世說』			c 構想のみ	友 889 / 偶 322・338
『二十四孝贊』			a 張潮作	友 889・995 / 偶 403
(『廿四孝贊』)				

『溫泉志』													
『月窟』													
『説夢』													
			『三藏法數』	『法苑珠林』	『指月錄』	『傳燈錄』	『衆香詞』	『讀書論世』					
			c 一如等編	c 唐・道世編	c 瞿汝稷編	c 北宋・道原編	a 錢岳編 (張潮も關與)	a 吳肅公作	a 張潮先祖?	a 張潮編?	c 毛際可作	『孟子古人名』	
			偶 338	偶 338	偶 338	338	偶 337	偶 337・338	偶 337・338	偶 322	偶 322	『(十六國)年表』	
												『家禮補』	
													『改葬服議』
													c 唐・韓愈作
													c
													友 1007
													友 1007 / 偶 431

						『名泉志』
						『塔士志』
		『乞者王翁傳』				
		『崑山馬弔牌』	a 徐芳作 c 不明			
		『貧士傳』	c 黃姬水作			
		『高士傳』	c 晉・皇甫謐作			
		『博古牌』	c 汪道崑作			
		『水滸牌』	c 陳洪綬作?			
		『琵琶摘句』	c 無名氏作			
		『西廂摘句』	c 無名氏作			
		『四書句』	c 無名氏作			
		『唐宋七言句』	c 汪道崑作			
		『珂雪詞』	a 曹貞吉作			
		『鶴邊詞』	a 顧彩作			
		『壺菴詩集』	a 李沂作			
		『寶顏堂〕祕笈』	c 陳繼儒編			
			c 構想のみ			
			c 構想のみ			
				偶 403		
				偶 390		
				偶 390		
				偶 390		
				偶 390		
				偶 390		
				偶 390		
				偶 390		
				偶 390		
				偶 371 ・ 415		
				偶 371		
				偶 371		
				偶 371		
				偶 338		
				偶 338		

『八詠全集序』	『追尊興獻説』	『再來詩識記』	a 沙張白作 (『虞初新志』卷九)	偶 403
			a 張鼎望作？	偶 403
			a 張潮作	偶 415
		『酒政』	a 吳彬作	偶 415
		『浮園詩』	(『檀几叢書』餘集)	偶 415
		『黃山賦』	a 不明	偶 415
	『秦腔論』		a 釋中洲作？	偶 415
『南北禮考』			a 張鼎望作	偶 427
『(曹陶謝) 三家詩』			c 張潮作	偶 427
			a 張潮編	偶 431
		『全唐詩』	c 康照帝救撰	偶 437
『奚囊寸錦』			a 張潮作	偶 437

※書名または作品名と推定されるものには『』を、出来ないものは「」で括った。
 ※『友聲』、『偶存』の登場順に示したが、一部便宜的に順番を入れ替えた。
 ※友―『友聲』 偶―『偶存』 ※なるべく原文通りに示したが、補えるものは（ ）にて記した。
 ※備考欄作者は張潮と同時代の人物以外は時代も示した。
 ※備考欄アルファベットの意味は以下の通り

a. 「やりとりされたもの」
 b. 「やりとりされた可能性があるもの」
 c. 「その他、書簡中に登場しただけのもの」

注

- (1) 例えば、「張潮と江南文人の交流——書簡を手がかりに——」(『中國古典小説研究』十八號・二〇一四年三月)、「張潮編纂の叢書について——編集狀況を中心に——」(大東文化大學『漢學會誌』五十三號・二〇一四年三月)「書簡から見た張潮『虞初新志』の編集狀況」(大東文化大學『漢學會誌』五十四號・二〇一五年三月)等を参照。
- (2) 「張潮の交遊關係について——『尺牘友聲集』及び『尺牘友聲偶存』を手がかりに——」(『漢學會誌』五十二號・二〇一三年三月)
- (3) 「張潮『尺牘友聲集』『尺牘友聲偶存』研究資料編」(『中國學論集』三〇號・二〇一二年十二月)、「友聲」は表?、「偶存」は表3の通し番號にそれぞれ従う。
- (4) 河井義樹「王弘撰年譜考證」(大東文化大學『中國學論集』十八號・二〇〇一年三月)
- (5) 劉輝「張鼎望與《秦腔論》——讀曲隨筆」(『陝西戲劇』一九八一年第一期・一九八一年十月) 參照。
- (6) 『涇獻文存・涇獻詩存』稽注』(『涇獻文存・涇獻詩存』稽注) 編纂委員會、涇陽縣檔案局編、柏塹編、風日乾・何金凱校注。三秦出版社・二〇一三年) による。
- (7) この他張一族に對する墓誌銘として、『文存』外編卷五に、王豐川「張公湛川墓誌銘」、程邑「張文靖公墓誌銘」、徐容「張公重齡繼配申安人墓誌銘」がある。
- (8) 「按狀公諱重齡、字九如、別號倚峨。涇陽之管村里人。戊子舉于鄉、令邢臺、以水部郎終。「中略」曾祖朝龍、誥贈奉直大夫。山西崞嵐州知州。祖鑑、山西太原府同知、加陞運鹽使司運。同祀名宦鄉。賢父炳璿直隸滿城縣知縣。歿鄉人私諡文靖公。其中子也」
- (9) 『重修涇陽縣志』(二十卷)、『中國方志叢書』2336・臺北成文出版社・一九六八—七六年) 卷九・藝文
- (10) 『重修涇陽縣志』卷十二・列傳・仕宦に「張炳璿、字義昭、號飢菴。崇禎間以貢士保舉、授滿城縣知縣、甫市歲而撫綏有方邑稱大治。清介不合於俗、遂罷歸杜門著書。晚年尤工樂府、有亂菴集二十卷。子潮問崇禎間貢士、重齡順治戊子舉人」とある。また、『陝西通志』卷五十七・人物三にも「張炳璿、字義照、涇陽人。父鑑、太原同知、督餉偏頭關。勤能有聲。炳璿以貢生崇禎時授滿城令。甫市歲而綏輯撫循。邑稱大治、以清直不合於時。歸里閉戶、著書詩文多傳世」とある。
- (11) 前掲『重修涇陽縣志』卷九・藝文
- (12) 『陝西通志』卷五十七・人物三「張重齡、字九如、涇陽人。順治戊子、舉於鄉。十二年、授直隸邢臺臺令、重農息訟、除積弊、雪冤獄。政績茂著報最、補工部都水司主事、奉命督通昌草場、督寶源錢局、又出督臨清稅務兼攝倉儲錢法。裕國通商措施、悉

當大司空。重其才、會河決淮安選員協理以重齡名上先是南北河決塞不常中河、一役九載未就、尤稱危險。重齡至逐奏績復命後、以積瘵成疾、給假歸卒。子鼎梅、康熙丁丑進士」

- (13) 『重修涇陽縣志』卷十一・列傳・仕宦「張重齡、順治戊子舉人。初任直隸順德府邢臺縣知縣。邑有冤獄、株連無辜。順德知府索厚賄、不得必欲置之死。重齡洞悉其冤、執不肯從、卒得昭雪。擢水部司主事、累膺差使有能聲。子鼎梅康熙丁丑進士。任東明知縣、居官循良、雅有父風」

- (14) 前掲『重修涇陽縣志』卷九・藝文

- (15) 前掲「程邑「張文靖公墓誌銘」に「長潮問、貢生、艾年沒、娶李氏、江南治中李公弘楨女。繼娶閻氏、義官閻可封女。…孫七、鼎璫・鼎鎮・鼎鼎・鼎穀、俱長出」云々とある。張文靖は張潮問の父張炳璠のこと。

- (16) 例えば、「鼎梅、康熙丁丑科進士、吏部候選知縣。娶常文學日昕女。鼎望、國子監監生。娶前辰州府同知王公廷棟女。申安人出」云々とある。

- (17) 「祭五兄文」に「維康熙五十三年歲在甲午春三月壬戌、期服劣弟鼎望謹以剛蠶庶羞清酌瓣香之奠、致祭于皇清進士東明令五兄嘯翁陝西之靈曰、…乃在丙辰之季秋焉。維時兄三十而弟十四、晨昏定省聯翩」云々とある。

- (18) 『東明縣誌』(『中國方志叢書』513)

- (19) 前掲『重修涇陽縣志』卷十二、張重齡の列傳に「居官循良、雅有父風」とある。

- (20) 前掲『重修涇陽縣志』卷九・藝文。

- (21) 前掲「墓誌銘」に「余門下涇陽張子鼎梅、丁丑成進士。將歸請謁於余、探懷中文一軸見示余、以其爲燈帷之舊業者是也。進士長跪曰、此先府君行事沒焉、而不彰顯。假先生之言、寵黃壇以不朽。泣涕泫數行下。嗟乎、進士斯不負揚名矣」云々とある。

- (22) 卷五「白渠記」、卷六「嵯峨山寺」(七律)、「輓節婦梁氏」(七律)

- (23) 前掲『重修涇陽縣志』卷九・藝文

- (24) 「友聲」889・新集卷三

- (25) 他作品で鼎梅を「五兄」と記しているが、これは恐らく排行順であろう。

- (26) 前掲「墓誌銘」に「繼娶員文學應龍女」とある。

- (27) 前掲「墓誌銘」に「元配雷氏有淑德早卒。年甫三十以公貴敕贈安人、與公合窆。繼即令敕封安人申也。丈夫子三、定和歲貢生。娶師舉人心知女」云々とある。

- (28) 「但前此一函、竟未寄到。浮沈之故、幸追究之。茲因申六舍親赴揚、肅啓鳴謝并候道履：」
- (29) 「客歲夏五、申舍親歸承手教、：」
- (30) 「晤申舍親、知老長兄先生近祉常勝」
- (31) 確證はないが、華中丞とは華顯のことか。覺羅華顯、滿州正紅旗の人。一六五九—一七〇三。康熙四十—一七〇一に陝西巡撫となつてゐる。『清史稿』二七六に列傳あり。中丞とは巡撫の舊名。
- (32) 「：。諸書護以翳葉、喜不爲雨水所濕。然採損過半、用大石壓之、多日尙未平。復嗣後、如叨再寄、止託申舍親爲佳。蓋彼納之中箱、自無諸患。且居處與寒家相近、到日轉致亦甚便也。：」
- (33) 前掲・劉輝「張鼎望與《秦腔論》——讀曲隨筆」
- (34) 「夏日接片札、云、客秋有瑤函書籍之頒。愚意以爲、即客夏所寄。又云、弟次札已收到。因目下懷抱作惡、不及裁答。乃今十月十三日、又接長札並書籍一束、而札中所言大抵皆補前札、未盡之辭。於弟次札則一不及。初視之、茫然反覆詳諦、始知長札本在片札之先。片札到日、此長札尙在濡滯、此札經歲後達。想緣陳西老萍踪無定所致。若托舍親申六老寄之、必無此患。：」
- (35) 「冬月琅函于今歲二月二十日到舍。甚矣、寄書之難也。細讀來教、知愚一札先後舛錯、此員令親稽遲半載、復托陳西老以致如此」
- (36) 「首夏有書籍隨八行奉教。秋分猶未得回示。不勝浮沈之懼。嗣接瑤函暨新鐫四種、似是客歲所頒、則知濡滯又非一日也」
- (37) 「友聲」888「往以天涯萍梗、幸邀老仲臺詞宗分外垂青引之譜末兼惠佳刻種種、：老仲臺稽古自娛。著述等身、眞第一流人物也。抵里後、逢人說項無不敬服、正擬修候。乃承華札、遠頒佳祝。：有胞弟鼎望、強作解事、其慕藺之私并先人著作數種、俱詳載其札內。：」
- (38) 「友聲」889「戊寅之秋、家仲氏自南旋、斗酒相勞。即聞命云、廣陵有山來先生者、當世偉人也。余與之聯譜訂交。汝好事風雅爲山川所阻、不得一識荊州。已出見惠諸刻盈箱積案。望取而讀之、如上林春花遠近瞻望、無處不發。又如武夷九曲、步步引人入勝。輒不禁俯而思、思而歎也。竊念望自束髮以來、身患清羸、逐棄去學子業。有志于古。既晤頻陽李子德先生、稍聞緒論。乃知學問之大、茫若苦海。相與把臂談心偶。及金元以來、關中數經兵燹、文獻缺略、往往惆悵者久之。方今八股之外無文章、科名之外無人品。卽吳越風氣正萃之地類皆急于功利、視古學爲虛文。望孤立寡偶、顧影而悲。不圖大江之濱有豪傑、焉得長兄先生、登高而呼主盟壇坫、慰我心、期何快如之。急欲裹糧南下操慧門庭、緣老母在堂、不敢遠離。兼之賤恙未痊姑俟異日。昔唐人任華與李白、遙聞相思不必謀。而望於先生亦猶是。已先生才高、學當思銳力彊。故諸所著述者出人意表居然。東箭南金、竿頭之步則在錄。其小尤貴圖、其大合乎時、尤追貴乎古。管見一二附有求請俱條例于後、蓋惟先生爲能不朽、自命亦惟先生爲能

不棄。芻蕘望山陬樵樸，似不宜妄瀆龍門。然遭逢一旦，雖冒交淺言深之戒，所不能辭矣。伴函不腆并希笑留」

(39) 『友聲』400、題名割注に「七言古」と記す。

(40) 『友聲』683に「爰踞十年之精刀、輯十三經文緯六十卷」とある。

(41) ①「一、承惠老伯大人詒清堂集十七卷、已細領教矣。聞猶有檀弓問・雲合臥餘等。皆望所未見。伏惟各惠一部爲感」

②「一、承惠尊刻種種已細領教矣。聞猶有聊復集・花影詞・下酒物・逸民四史・李杜牌・博古牌・弈乘・禽史・禪世說・仙世說・二十四孝贊・張籍全集凡十二種。皆望所未見。伏惟各惠一部。蓋望非屢索又不多索想先生必應也。惟張籍集非著作一類、其紙價明示望當奉補」

③「一、承寄四書尊註解、精詳明足以羽翼考亭。嘉惠。後學望所謂圖其大者此類是也」

④「一、承見懷家兄一律、秀折纏綿、得中晚三昧至自然渾成脉。一絲不走。仍是盛唐氣味敢不敬服。但次首既云獨灑西州淚、又云、獨留俠氣兩。獨字宜改一字」

⑤「一、承惠諸書皆是散葉。奈吾秦僻處西陲裝潢無人。勉付俗手則鹵莽不堪。未免有玷珠璣。嗣後如叨再寄、伏祈精訂成本惠我遠人。其紙工線之費、明示望當奉補」

⑥「一、承惠檀几叢書止得一集二集。虞初新志得八卷。嗣後如有續編、伏祈惠寄。其紙價明示望當奉補」

⑦「一、承惠友聲止于壬集第二十六葉即釋廣蓮一札亦不全。尺牘偶存止于五卷第十三葉與四弟質生札、想年來續梓必多。伏祈查號補寄散葉可也」

⑧「一、按友聲俱係尺牘。惟載朱其恭七言古一篇、以詩代簡畢不倫。望思先生應求既廣倡和必繫。伏願舉有韻之言、別勒一集、斯與尺牘相映生輝矣」

⑨「一、按友聲海寧沈太史有十三經文緯之刻。望雖未見其書、想于經學有功。因思二十一史・資治通鑑・朱子綱目而外、間有古史荒史。帝王世紀・吳越春秋・楚漢春秋・東觀漢記・英雄記・謝承後漢書・干寶晉記・王隱晉書・十六國春秋・元澹魏典・唐鑑・劉昫舊唐書・薛居正五代史諸書、今日不知傳者幾何。伏願先生與貴鄉同志者廣搜遠索、勒爲一編、名曰逸史大觀。其存亡之功當與海寧迭霸」

⑩「一、如太平寰宇記・括地志・漢官儀・古今注等書皆昔曾顯傳于世。今雖罕見、恐未必如周禮冬官之絕無也。伏願先生廣搜遠索、翻刻行世。其繼絕之功不小。望所謂追乎古者、此類是也」

⑪「一、按韻之一書、洪武正韻殘序例中已明言之顧寧人李子德兩先生辨之、尤詳以爲自三國李登始作聲類。其後代有作者至梁

沈約作四聲類譜，宋濂謂唐取此書科士改名禮部韻略。然天寶間，陳州司馬孫愐又作唐韻。今考其自序但就陸詞切韻刊正討論成書。初不及類譜，其與沈韻或同或異，皆不可知至宋祥符間陳彭年等又唐韻重修，改名廣韻。其書顧寧人先生嘗校刻之。今其板見藏淮安張氏家。至理宗時平水劉淵又取廣韻之通用者併爲一部復刪去閒冷諸字，于淳祐壬子，名壬子新刊禮部韻略。此卽今見行韻本也。適讀尊著答顧天石一札云，近日購得古本，豈廣韻之外，別有古本歟。抑所購者卽廣韻，偶隱此廣之二字歟。又云，後沈約輩合通用者爲一部，定爲一百六韻。名曰禮部韻。此語大誤。蓋韻略著于唐，沈約生在唐前。韻略併于南宋。其時去沈約益遠。但當云今韻本乃劉平水所併之韻。其曰通用，獨用。蓋緣刻者沿廣韻舊文，未曾削去。故滋後人之疑耳。如此則是矣。至合殷於文爲一部以獨用爲通用。此亦平水之過揣其意大抵以殷部除諸閒冷字所餘甚少。姑妄附于文也。先生山斗之尊，望輕爲置喙正忝附雁行不欲白璧有微瑕耳。唐突之罪，伏祈鑒原。

⑫「一、伏讀尊著復李文山一札云，三江七陽無合用之理，且以字之偏傍，及毛詩證之。其說極確極當。與李子德先生亦合。然韓昌黎此日足可惜一篇，合用江·陽·庚三韻中原音韻·洪武正韻皆江·陽同部，其誤也。亦一口矣。至先生以支·微·齊·十灰之半爲一韻。李先生則以支·微·齊·佳·灰爲一韻。先生以真·文·十三元之半爲一韻。李先生則以真·文·元·寒·刪·先爲一韻。■■■■「小塚注——文字不鮮明。或いは雙行注か。「老村彭尙／行使如此」想各自說非望所能解也」

⑬「一、按友聲朱贊皇有集句之選，可稱創闢。望思帖子語亦從無有專刻。如雨打無聲鼓子。花月滿鬼兒肥之類皆昭昭人耳。又笑史·一夕話等書亦閒載名聯。況先生聯壯·聯騷皆巧奪天工，生平佳句必多，伏願廣搜博采，合古今帖子語，勒爲全書亦小品中一奇也」

⑭「一、伏讀尊著筆歌可以凌壓關·王。望思元曲之稱佳者西廂·琵琶·拜月亭。今西廂有金聖歎評，琵琶有毛聲山評。惟拜月亭尚在缺然。伏願先生出其靈心，妙筆點綴成評亦小品中一奇也」

⑮「一、按竹枝詞始于唐劉夢得，後來作者，雖多從不有專刻。近朱竹垞先生有鴛鴦湖權歌，尤梅菴有外國竹枝，孫沙村有朝鮮珠江等竹枝。想先生必有黃山維揚等竹枝。伏願廣搜博采，合古今竹枝詞，勒爲一選。不惟適性陶情，兼可省方問俗，亦小品中一奇也」

⑯「一、伏讀虞初新志凡例知諸選家積弊陋規。先生固皆刷去之矣。望思詩之一道唐人初盛中晚各有佳處。今雖貴鄉風氣俱尙中晚。然初盛尙可廢也。先生如操選政，伏願地無分南北，人無分貴賤，詩無分盛中，大公至正方可傳之永遠，如唐選多矣品彙一書，獨較彰明者，職是故也」

⑰「一、忝在同譜先人履埋埋宜相聞。但寒家三代志銘浩繁，尙未付梓。今姑錄先會祖諡記一通先祖別傳一則。伏祈先生暇日賜

覽則厓略可知」

⑱「一、先曾祖舊有易占發蒙說略一刻謹此呈上。先生於易道家學有原是非可以立辨如其可傳。伏祈留表彰歿存均感。其刻資明示望當奉補」

⑲「一、先祖舊有劄菴集二十卷、鼎革以來散逸過半。今姑錄手讓文一篇。曲二套又舊刻杜陵秋咏一冊呈教如其可傳。伏祈留神表彰、歿存均感。其刻資明示、望當奉補」

⑳「一、拙作不一、俱堪覆瓿。今姑擇賦八篇·集杜三十首·集唐八首·曲一套·竹枝十首、對話十條繕本呈上。實以就正大非敢自炫其美。千祈先生勿拘常例。逐一筆削詳施評語、仍將原本寄還在望固資玉成亦足徵先生聲教訖于四海。倘其中稍有可采尤望嗑枯吹生乘便表彰一二則鶻鶻之雅感逾骨肉。其刻資明示、望當奉補」

㉑「一、敝村八咏、拙作甚夥。其他見和者亦不少。今特錄八景考一冊呈上。伏祈先生不拘體裁、依景賜詩即詞曲皆可尤望。廣徵同人、務使遐荒泉石借琬琰以生光望則感甚」

㉒「一、今後如承寄書須託申舍親或員舍親覓三原安人付之、庶不致浮沈損濕其卷帙、如多即與彼言明、到家之日、望即補其腳價則彼自不畏難矣」

(42) 「偶存」322「客歲仲冬、杜門靜坐、忽有異光自天而下、接而視之。乃吾老宗臺先生之瑤函佳著也。更拜兩世藏書高文大冊如見先輩。典型喜慰為劇久、欲作報章。因賤體多病兼以剝藤。忽刷印無從以致遲緩為歉耳。種種教言、具悉雅意尤為感。勒附復數行于左以當晤言外、具廣陵葛一端詩扉一柄。伏惟笑而存之。是禱臨風翹企曷任瞻依」

(43) 「(1)「一、承先君各種、今補寄上。幸照單查到并示回音」

(2)「一、承拙著種種內所云聊復集、半皆少年遊戲之作、久不刷印。今補奉昭代叢書下酒物并三字經闈訓。其餘如花影詞則尚未授梓。如逸民四史·弈乘史·禪世說·仙世說尚未成書。惟李杜牌已刻、容後續寄。其博古牌錄稿呈教、此種擬繪畫為圖緣內有三四分。不甚愜意。倘吾兄肯為弟改正而補足之、尤足徵雅愛也。其張文昌集、不識襲半老存于何所無從查考矣」

(3)「一、向日奉懷令兄長兄先生詩內重一獨字、承摘出感甚。今擬改獨灑西州淚為痛灑西州淚、不識可否」

(4)「一、承諭書宜裝釘、今謹如命。」

(5)「一、友聲補奉全部。其尺牘今已得八卷嗣當續寄」

(6)「一、朱其恭兄七古一篇以詩代東原不過遊戲之作、若海內名流見贈瑤篇自當另為一刻」

(7)「一、所云海寧沈太史十三經文緯。弟曾親見其書大抵皆古人談經學文字欲進呈而未果者、若所云正史而外尚有多種。此種

種書如吳越春秋·東觀漢記·英雄記·十六國春秋·劉煦舊唐書之類，世皆有之。不待表章者也。若彙爲一書，世安得有此大力乎？」

(8) 「一、所云太平寰宇記·括地志·古今注等書、漢魏叢書內有之」

(9) 「一、韻學云云此事原有一定不移之理如顧寧人·李小德兩先生所言皆極有源流可以爲法。近人往往誣及東陽。卽弟初年亦不免有之。今始知其謬耳。其答顧天石札內所云、近得古本者、卽指廣韻而言其譌謬處、承爲摘出眞潮之益友也」

(10) 「一、所云昌黎此日足可惜一篇、合用江陽。此原弟所不解。卽如離騷首篇、庸降合用是矣。接用名均能諸韻亦不曉。所謂卽讀能爲耐以與下文態字相叶。而名均二韻之叶亦古所無也。大抵江陽之合、自北宋始、此沿至今日。我輩口中自無異同、非中州韻并洪武正韻之誤。乃立譜之時、其音是如此耳。卽六麻一部始自齊梁。車遮之韻始自金元可見。用韻之法當隨體製而分。潮于叢書乙集小序中曾言之。至所云以支微齊十灰之半爲一韻此不過于古人通用之中、取其不棘于耳者竝不敢溢于古人之外云耳。非有他意也」

(11) 「一、所云帖子語是卽指對句而言潮亦嘗有此想。然當意者絕少。今錄數條于別楮以資。欣賞若彙爲全書。此必不可得之事也。潮嘗謂前明掛枝兒·打鬻竿之類皆是絕妙小品、歎今時無之。所以然者明代名妓所往還者皆唐伯虎·祝枝山諸公自有如許風流佳話。近日未嘗無劈破玉·倒搬槩·呀呀啣諸調、其俚鄙不堪令人欲嘔。不知尚有如唐伯虎·祝枝山諸公之作乎。又如酒令·雅謎之類亦未見有流布之書。近年止見毛會侯先生孟子古人名耳。如此等類、原不必其成書。但有佳者卽爲筆之于書以備。後來繼起者之採取亦我輩所宜留心也」

(12) 「一、拜月亭傳奇雖前人極力推重。然此等批評惟金聖嘆能之卽毛聲山之評琵琶、張竹坡之評金瓶梅皆未免稍遜。若吾兄能另出手眼與聖嘆齊驅、俾潮得開擴心胸是所願也」

(13) 「一、竹枝詞選、弟向亦有此想。然搜羅不易、若掛一漏萬。必致貽譏、識者是以不敢輕易從事」

(14) 「一、承諭選詩、初盛中晚不宜偏向、誠然、誠然。然弟不敢操詩選政以其中情面是非、斷不能免耳」

(15) 「一、承示令先曾祖老先生諡記·令先祖老先生別傳、不啻親炙先賢。今寄上先學憲行狀一冊、閱之亦可知寒家大略也」

(16) 「一、承頒示易占發蒙·手讓文·杜陵秋咏諸種。倘有操觚家選及前代著作自當代爲留神」

(17) 「一、大著種種無一不佳、俟有可借光處自不憚表章也」

(18) 「一、貴鄉八景考係友人帶往吳門。今亦不知其何所往、俟從容報命」

(44) 『四庫全書存目叢書補編』第一冊所收。全十二卷、補遺四卷。

- (45) 「必徵之京省各路、各路中又須有知交代爲搜討并酌其可存可刪、然後各成一書……」
- (46) 「又承詢漢魏叢書七十六種内、竝無寰宇記・括地志等書。愚所見漢魏叢書、各部不一。或有此而無彼、或有彼而無此」
- (47) 但し、現存する『括地志』が叢書に採録されるのは張潮の死後であり（『黃氏逸書考』等）、清初の時點でどのように存在していたのかは不明である。
- (48) 「蓋因古人于此、未編總目、卽失去數種亦無從查考。惟有遇此等書、不妨重複收買。庶幾可耳。然究不能全也。卽陳眉公秘笈亦坐此病。愚向有鑒于此。是以拙選叢書每卷之前及板心皆有叢書總名。復註卷之幾、其各種本名附于其次、庶不致有遺失之患耳」
- (49) 「至令祖老先生手讓文、愚于此等題藏稿頗多。與檀几餘集選例、尙有未合」
- (50) 「先祖手讓文竝填詞擲還。豈偶誤歟。又閱檀几餘集、俱零星小品、先祖手讓文例應得采入。何老兄臺先生竟不一顧、宿諾而棄置之耶」
- (51) 「先大令手讓文、承老兄臺先生慨付剗、且綴以美評。歿存俱拜明德于不朽矣。其刻賞容圖補寄」